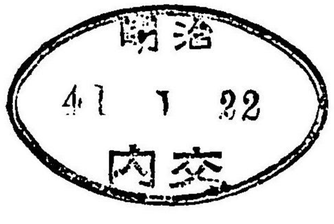
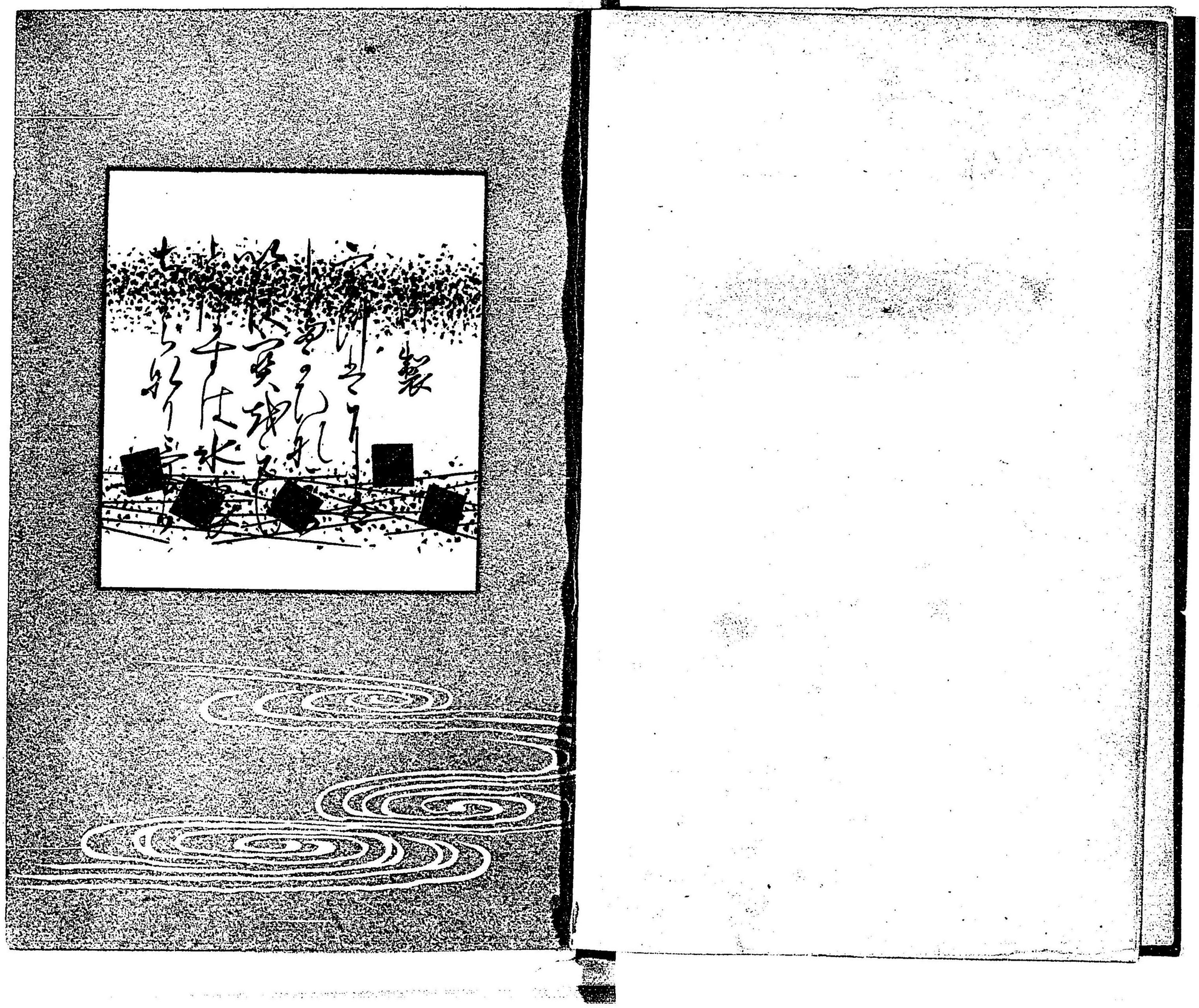
19-639

今上陛下御文德錄





御題は如何

御製は如何に拜見さるゝか

御製老農を起たしむ

貫之の贈位

二十三年の御製

戀歌の御製なし

御製

今上陛下の御文德

今上陛下の御幼時

東北御巡幸

十年の御凱旋

船中の御歌論

御歌所長の新任

如何にして御製は成るか

今上陛下御文德錄

吾人が誇りとする所は種々樣々である、獨り自ら得意と思ふ物、心に嬉しく有難く感ずる物も、亦決して僅少では無い。けれども此等の情を一括して、吾人が最大の極殆ど無限の幸福であると思ひ、絕大の誇りとする所のものは何て有るかと言ふに、實に吾人が明治の日本に生れ合はしたと云ふ一事である。

明治の日本に生れた事が、何故に斯く吾人の幸福て

あるか、誇りであるか。云ふ迄もなく吾人が上に明治天皇陛下を奉戴して居る爲て有る。今更此説明をするのも恐れ多いが、順序として少しく述べなければならぬ。

試に萬國史を披いて見よ。自ら馬を陣頭に立て、百萬の貔貅を麾きて旗鼓整然、輸贏を丘上の一戰に決し赫々の武勳を樹てた帝王は、必ずしも其例に乏しくない。閉居閑座爐を撫じて、文筆に親しみ文藻の見る可きもの有る君主も、亦必ずしも其例に乏しくない。けれども凡そ帝王の偉業として、我が　明治天皇陛下の

成就し給ひし維新の大業程、人倫に基き開明を宗として而かも燦爛たる光彩を世界に放つた偉業は無い。又我が　明治天皇陛下が宣戰を布告し給ひし程、公明正大なる旗幟の下に外國と兵を交へ、而かも此の如き戰勝の榮譽を得たる元首は、世界何れの國史を見るも其類例は無い。而かも又君主の文學にして我が　明治天皇陛下の御文藻程、豐富にして情趣に饒かなるものは、無論古往今來其匹儔を見る事は出來ぬ。況んや如上の大偉業と大武勳と加之大文德とを兼ね具へさせ給ふは、幾度歴史を翻讀するも我　明治天皇陛下

に似奉つた帝王も無い。吾人は恐多くも此點に於て萬國に對して絶對の誇りを有する。吾人は思念一度陛下の御事に及ぶと殆ど雀躍抃舞せざるを得ない。噫、吾人は如何なる前世の功德にて此の如き絶大の光榮ある帝國臣民と生れたのであらう。

維新の大業に就ては、既に最近の歷史が詳細に縷述して居る所である。又數回の戰役に關しても、遺憾なく聖旨は發揮されて居る。けれども我が陛下の御文德に關しては尙世に公にならぬ事が多い。勿論是は帝王の偉業武勳が極めて絢爛華麗なもので其文德

は却て清趣に深い爲ではあるが、吾々臣民は今上陛下の御文德を世に示す可きものであると信ずる。

此見地よりして仄かに洩れ聞えたる今上陛下の御文德を採錄し奉りて洽く世に示さんとするのが、此書發行の因緣である。

今上陛下の御文德

ロイド博士御製を英譯す。

一日五十首の御製あり。

既に前にも述べた通り我が　明治天皇陛下の御偉業と御武勳とは實に青史に類例なき洪大のものであるから、世界萬國均しく仰ぎ望まぬ者は無いが、御文德は國民の間にすら承はつて居ない者がある。是れ畢竟するに　陛下の御謙德の然らしむる處であるが、日

露の役以來は新年の御製以外に折々の御製を拜する事が出來る樣になつて、國民は大御心の程を推し量り奉りて、其恭けなさに感泣して居る。尋て永く本邦に在留せるロイド博士が多くの御製を英譯して美麗な一冊を出版し、以て萬國に紹介したから、茲に始めて陛下の御文德は萬國の驚嘆と欽仰とを蒐むるに至つた。

熟く我が　陛下の事を承知しない者は、陛下の御文德を人間業では無いとさへ讃へ奉つて居る、といふのは陛下は一日に五十首位の御製をあそばし給ひ。明治十年以來の御製は積り積りて其數七萬にも餘ると

いふ御事であるが、實に常人の企つ可き限りて無い。

申す迄もなく萬機を親裁し給ふ　天皇陛下の御劇務は非常なもので、常々の歌人などが悠々として對几閑座する如き御暇は少しも在らせられぬ。御講書がある、御學問所に御政治の御用務がある、引續き内外人の拜謁がある。到底御靜座の御暇は無い。其間に陛下は五十首から御製を遊ばすとは實に神業である。

由來和歌といふものは容易からざるもので、古來の歌人は皆、一生涯に一首名歌が出來れば、歌人として名を後世に貽す事が出來ると稱して居る。而かも此一

首が中々出來かぬるもので、一生涯に遂に一首の名歌をも貽さぬ者が多い。斯く容易からぬものであるから、内外繁劇な身は到底歌は詠めない、室を清め机を拂ひ、靜座沈思して始めて曲りなりにも歌は詠めると思はれて居る。所が我　天皇陛下は前にも述べた通り其御用多な事は普通人の想像し奉り得ぬ程であるにも拘らず、一日に五十首の御製があらさせられるとは、實に凡人の察し奉る事も出來ない事である。現に外國人などは始め信じ得無かつたといふ事である。然し乍ら其御製が一として優渥なる大御心の流露せざ

る無きを見ては更に〳〵感激せざるを得ない。或時は世道人心を警め給ひ、或時は國土臣民の上を慈しみ給ひ、軍士の身の上を、窮民の憐れさを、一々金玉の御製の上に示し給ふは、實に世界に其例有る可らざる高崇にして仁慈に富ませられた帝王て在せられる。

陛下が如何にして此くの如く歌道に御熟達あそばされ、畏くも世界に其文德を馳せ給ふに至つたかは、洩れ聞えたる限り詳しく謹述して逐一國民に公けにし、共に〳〵我　陛下を仰ぎ奉らうと思ふ。即ち御幼時の御研學より始めて東京御遷都後、東北御巡幸、十年役

御凱旋より引續き御歌所の御模樣最近の御製などを記さんと思ふ。以て　陛下の歌道に對し給ふ聖旨も窺ひ奉る可く、亦以て臣民の心得ともなるてあらう。

今上陛下の御幼時

先帝の叡慮

今上の御日課

先帝孝明天皇の叡聖文武に渡らせ給ひし事は、國民一般既に萬々承り及んだ所であつて、今上陛下の古今の英主に渡らせられるのも、亦實に先帝の御氣象を踵がせ給ふに因ると察し奉られるのである。斯く英邁に渡らせられた先帝は、今上陛下の御幼時を

如何に御薫育あそばしたであらうか。

申すも畏こき事ではあるが、今上陛下は御幼少の頃から和漢の御講書は勿論の事苟も御學問になる事は何によらず御學びあそばされたが、固より剛健の御氣象で在せられるから、文武の道に通じ給ひ、天晴古今の明太子と仰がれ給ふ事となつた。御齡八才に成らせ給ふと　先帝は御嗜の歌道を　今上陛下に御傳へあそばして、毎日五六題づゝ和歌の題を賜はる事になつた。如何に英明無比の　今上陛下も御幼少の事ではあり、此毎日の敕題には一方ならぬ御苦心を嘗め給ふ

たといふ御事て、近く　陛下に仕ふる人々は、今ても度々此御懐舊の御沙汰を伺ふ事があるといふ話てある。

恐れ多い事てあるが、是を凡人にして考へたら、八才位で毎日五六題の歌を詠む事は、到底不可能の事てある。けれども　陛下は御苦しみはあそばしても、毎日御詠草を　先帝に御差上げになつた。此御事は　先帝崩御の頃まで變りなく御續けあそばしたといふ事てある。此樣な御幼時の御勉强があるからして、今に至て一日御劇務の中で五十首六十首といふ多數の御製をあそばす御事となつたのである。此御事を以て　今

上陛下の和歌の道に神の如く通じ給ふ次第が解るのであるが、又先帝が如何に　今上陛下を御薫育遊ばされたかも、此一例で其深い〳〵大御心を察し奉る事が出來る。

今上陛下御幼少の御勤學は右の通りて在らせられたが、先帝崩御ましまして　今上御即位の當時は、恰も維新の大變動が起つて、最も國務多端てあつたが、斯る際にも陛下は此神代ながらの敷島の道を捨て給はず、絶えず　御製をあそばしたといふ事て、其内東京へ御遷都となつた。其後の御事は項を改めて謹錄する

事に爲やう。

東北御巡幸

塵紙の献詠
埋木の花

帝都東京に遷りて幾もなく、宮内省に御歌掛といふ職をお置きに爲つた。是が今の御歌所の前身である。掛長は三條西季知卿で近代の歌人と崇められた人である、同じ掛りには有名なる八田知紀、福羽美静等の諸氏が居られた。其頃の侍從は堀川、富小路、西四辻など

いふ揃ひも揃つた一代の歌人が仕へて居られた。明治七年には左院少議官高崎正風男が歐洲より歸朝したが幾もなく左院廢せられて高崎男は侍從番長に任ぜられた。是が同男が宮內省に入られた始めて、未だ其時までは和歌の材を以て召された譯では無つたのである。けれども同男が侍從番長を拜命して始めて、

陛下に拜謁を賜はつた時は、陛下は既に同男が歌道に明るい事を御存知て、折柄御側近き鉢に咲誇りた

る牡丹を御指ざしあそばして、是を題に詠めと仰せられた相で、高崎男は其時程恐縮した事は無いと語られ

たといふ話である。

其內　今上陛下は東北御巡幸を仰出され、供奉の人々も夫々御下命があつた。恐れ多い事であるが當時國努未だ大に豐かならぬ時分であるから、御巡幸の御費用も出來得る丈け御儉約あるといふ事で御歌掛長の三條西季知卿さへ御召連れにならぬ事となつた。

てはあるが兼々御熱心の敷島の道なれば、御旅中必ず御製の事もあらうし、又奥羽の地は古來名歌に殘る舊蹟多き土地柄ではあるし地方人民から献詠する事もあらうから、旁々一人位は其心得ある者が君側に侍る

事にして置かぬと不都合てあらうといふ事て、幸ひ高崎男が侍從番長でお供をするから同男を御巡幸中御歌掛に兼任する事となつた。此の如くして現今の御歌所長高崎正風男は始めて和歌を以て　陛下に咫尺する事となつた。

陛下は其愛て慈しみ給ふ臣民を御覽ぜんと愈東北へ向け御發輦あそばした。所が沿道の民衆は歡喜の絶頂に達して奉迎したが、果して各地の献詠は夥しきものてあつた。然し乍ら夫が正當の手續を履んて天覽に供せんとしても到底願意は徹らないものとも

思ふてか色々の事をする。或時は御旅館の御用机の卓巾の下から詠草が出た事もある。或時は廊下の戸の隙間などに挾んだのもある。料紙書式も知らぬ淳朴の民は半切に書いたり塵紙に書いたのさへある。何とかして微意を天覽に供したい、せめては　陛下の御側近くまてゝも差出したいといふ眞情は實に〳〵麗はしく可憐のものてあつた。侍從番長で御歌掛を兼ねた高崎男は其書式の如何に拘らず前夜御前に伺候して、當日の献詠を一々　天覽に供せられた相たが、歌の中には方言が多くて上下一同解釋に苦しまれた

ものが度々あつた相だ。例へば

ぽつと鮭でも登り來よかし

といふ下の句なども分らなかつた相だが、土地の人の説明で「ぽつと」といふのは澤山といふ意味で、結局陛下の御巡幸を難有く思ふけれども献ずべきものも無いから、此際此川に澤山鮭でも登つて來たら、漁して奉献しやうものをといふ歌であつた。

此く奉献の詩歌俳句は非常に集まつたから供奉の岩倉具視公をはじめ高崎正風男等は協議の上、献詠を悉く編輯して梓にし美麗なる書物を作りて奉献者にも一部宛を賜ふ事にしてはと發案された、此提議は實に當を得たものであつたと言はねばならぬ。

惟ふに當時は封建の制破れてより幾年にもならぬ。地方人民の主從といふ考は、未だ中々舊藩主と民衆との間に強かつた。特に同地方は一時の行違ひからてはあるが、官軍に抗して奮戰した所である。然るに此際陛下親しく其地に行幸あつて、庶民を見給ふのであるから、土地の人民は此時始めて、日本帝國の一民であると自覺した者もあつたどらうと思はれる。從來九重雲深き邊に在ます陛下と、此一度は朝敵と指さ

れた東北の邊民とは、洪大なる隔絶があつた樣に思はれたのに、今一々民情を御覽あそばして、邊民に優渥なる聖旨を賜はつたのは、其土地の民衆に取りては、實に言はん方なき光榮で名譽であつた。古來勤王の誠意を傳へて居る東北人は一齊に奮起した。今上陛下は吾々の直接仕へまつる　天皇で在らせられる。

忝けなくも。吾々は　今上陛下を今此草深き道の邊に拜し奉りて、誠忠の何物たるかを神來の情により胸裡に印するを得た。噫、吾人は日本帝國の臣民である、今上陛下の赤子であるといふ樣な感情は東北

一帶に漲ぎつた。此際の此境に供奉の人々の提議として献詠版行の件が出たのは實に有力なる理由を有すると見なければならぬ。此擧を聞いた献詠者一同は勿論地方人民は如何に歡喜の餘り狂舞したであらう。

陛下は東北の風土と民情とを明にしたまひ、龍顏麗はしく御還幸あそばされた。

また御巡幸中に東京に留まり給ひし　皇后陛下の御歌に。

大宮の内にありても寒き日に

いかなる山を君はこゆらん

とあそばされたのは遠く御巡幸の今上陛下を御思ひ遊ばす御心の溫かく渥きを知る可きて、承はるさへ感涙を催ほす次第である。

御巡幸中御歌掛として供奉して居た侍從番長高崎正風男は御旅中一首も御製を拜見し無かつた相だが、是は風土民情を御研究あそばす事に御熱心の餘りであらうと察し奉られる。

御還幸後高崎正風男を始め御歌掛の人々の手によりて、献詠編輯に着手されいと、美麗なる書冊が出來上つた。即ち「埋木の花」と題せられたのが此書である。

献詠者にも賜はり其他にも民間に傳はつたものが多いから、世人も或は知つた人が多いであらう。

十年の御凱旋

高崎男爵始めて御製を拜見す。

富嶽の御製に感激す。

東北御巡幸の翌明治十年には　陛下は大和橿原に神武陵を拜し給ふ御思召であつた。

彼の征韓論は明治五年に起つた、七年には既に佐賀の亂があつた。兎角穩かならぬ風説は大西郷の退隱せる薩南の一隅から起つて居た。何れは一事起り相

な雲行急なる折柄、　陛下は西の方大和へ御發輦あそばす事となつた。此際　陛下は如何に深き叡慮に在ましたか、固より臣民の濫りに窺ふ可らざる事ではあるが、恐多くも當時の事情を察するに　陛下の畏傍御拜は必ずしも偶然でない事かとも察し奉られる。申す迄もなく　神武帝は我國建業の太祖皇帝に在まし、一代にして本邦の四域を定め給ふたのは、又世界史に類例少き事であるが、此　神武帝の陵の前に御禮拜あそばした　今上陛下の御胸の中は、如何なる御感慨が御起りになつたであらう。神武帝の偉業と　今上御

自身の偉業とを思召合せ給ひし折の事を、恐れ乍ら察し奉ると、臣民一同我知らず感奮せずには居られない事である。

陛下は畝傍の　神武陵を拜し給ひて、京都へお出になると、恰も西南の亂は起つたのである。陛下は其儘、大纛を京都に留め給ひ、諸軍の軍令を御司りあそばしたが。翌年彌西南の地も靜謐に歸したから、陛下は海路東京へ御凱旋あそばされた事となつた。

此御航海の船中にて、陛下は今の御歌所長高崎男爵を御信任あそばす事となつたのである。頃は六月

の暑照。遠州灘の航海は殊の外に蒸し暑く供奉の人々何れも流るゝ汗を拭ひあへず他愛もなく苦んで居たが、恐れ多くも　今上陛下は平常の御剛健には差したる御事も無かつたが、有繋に炎暑の酷しさには御氣色些か曇らせ給ひて、侍從の人々にも御物語稀てあつたが、侍從番長の高崎を呼べとの御沙汰があつた。高崎男は東北御巡幸に際して、臨時に御歌掛兼勤を仰せ付けられて居たが、東北から御還幸の後も彼の「埋木の花」の編纂があつて兼勤を解かれず引續き神武御陵行幸ありて、又解勤の運に至らないて、此時までも矢

張御歌掛の兼務であつた。高崎男は御召によりて何事かと御前に伺候したが、陛下は三首の御製を御下げになつて同男に御示しになつた。こは御凱旋御船中のもので、何れも富嶽を御望見あそばしての御製であつた。是が高崎男が今上陛下の御製を拝見するに至つた始めて、御歌掛てはあつたが此時まで御製を拝見した事は無つた相だ。陛下は右三首の富士の御製を御示しあそばされて、何れか佳きとの御下問であつた。此時同男は薩摩武士の卒直飾らざる人なれば憚る所もなく、中の御製を最も優れたる御製と存ずる

旨を言上した。其御製は久方振りに故郷に近づいて彼の目馴れた富士を望むのは誠に懐かしく嬉しいとの大御心を詠出て給ふたもので、畏こくも情想兼至る名歌であつた。

陛下は高崎男の此選び方を御意に召さなかつた。寧ろ外の御製に多くの御工夫を御回らしあそばして、其歌は却てずら〳〵と御詠出あそばしたものであつた。陛下は、何故に中の歌を佳しとするかとの御下問があつたから、高崎男は此御製は最も拝見する者を感動せしむるものにて、實に大御心の程をも窺ひ奉る可

き御製なれば斯か奉答したる者なりとの旨を奏聞した。

恐れ多くも　陛下は此時御歎息の聲を御洩しあそばして、高崎和歌は六かしき物よな。朕幼くして毎日父帝の御題を賜りいそしみつゝ、今に至るまで捨てざる歌の道は益々六かしく思ふぞ。との御沙汰であつた。而して暫時御沈思の御摸樣に拜せられたから、高崎男は叡慮を慰め奉らんと思ひ、何心なく、和歌の道は左程六かしき物にて候かと奏したるに　陛下は御氣色只ならず、屹と男爵を御覽ありて、茲に二時間に亘

る歌道の御議論とはなつた。此事は高崎男に問ひ訊したけれども、同男は上を憚かりてか左る事なしと打消された。けれども今は物故された某侍從が、生前其近親の者に洩らされた事實であるから、無論間違はない。世間には殆ど全く知れて居ない事實で　陛下の御文德を頌し奉る場合は、此の事實を是非とも公にしたいと存ずる。

船中の歌論

高崎男古今序を進講す。

陛下高崎男を信任し給ふ。

和歌の道は左程六かしきものにて候かと奏聞した高崎男の言葉は意外にも陛下の御意に召さなかつた。陛下は屹と同男を御見まもりあそばして。如何に高崎、「候か」といふは疑問の詞にはあらずや。と玉音は御詰問の調子であつた。高崎男は驚き畏れ乍

らも猶豫す可き限りて無いから。御沙汰の如く、候かと奏したるは疑問の詞に外ならず、元來臣は薩摩の一武漢、固より和歌の六かしきか否かは存知候はねど、私かに愚考する處にては左程六かしき物とは思はれ申さず。と奏し奉つた、陛下は御氣色益々麗はしからず、重ねての敕諚に。古來和歌の道程六かしきはなしと誰人もいへる事ならずや、一生に一首の名歌を詠ずれば歌人の名は殘る可し、二首とは望めずとは言はずや。淺きに似て深きは歌なり、容きに似て難きは歌なりと古人もいへり。さるを今汝六かしからずといふ、

必ず天下古今の名人ならん、唯今題を與ふ可ければ言下に詠みて見せよと仰せありて、直ちに料紙硯を召され、高崎男の前に夫を差置かせ給ふた。同男爵は用なき事を奏して御氣色を損じけるよとは思ひ乍ら、今更詮方なく唯恐れ入つて居たが、陛下は更に御聞入れなく促がし給ふので、男爵も。夫は餘り嚴しき敕諚なり、此炎暑と航海とに困める者に敕題を賜はりて即座に献詠せよとは……と奏したが、陛下は彌々御催促になる。高崎男は更に奏聞して。我が陛下は維新の大偉業を遂げ給ひ、歐米の文明を取り日本帝國の宏

謨を定め給ひ、四海仁君と仰ぎ奉るに、こは誠に嚴しき御沙汰なり。と述べられた。陛下は尙御心解け給はず。汝は朕を愚弄するか、左る事を言ひて瞞着せんとするか、茲にて歌を詠まざれば立つ事を聽さず。との御沙汰に高崎男は容を正して、臣は身に覺えたる藝も無ければ學も無けれど、未だ曾て人を欺きたる事は候はず、況んや一天萬乘の君をや、陛下の大御心にして臣を辱はす事右の如くんば臣は死すとも此席を退き申すまじ。と熱誠面に溢れて奏せられたから、陛下も始めて少しく御心解けさせ給ひし御容子に在まし

たが、更に。然らば汝先に歌は六かしからずといへり其理を述べよ。との勅諚であつた。

高崎男は仰せ畏こまりて。左れば其事に候、儒道の孔子、佛道の釋迦に比す可き歌道の貫之は斯く申し候。と奏せられたが、陛下は、貫之は何に斯か述べたるぞ、と問はせ給ふた。さん候、古今集に。と答へ奉られると。古今集に左る事ありや、朕は古今の序を讀む事數百度なれども左る説を聞かず、と仰せられた。高崎男は更に畏みて古今和歌集の序を暗誦し始められた、而して其概意を御講義申し上げられた。

大和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞ
なりにける世の中にある人事わざしげきも
のなれば心におもふ事を見るもの聞くもの
につけて言ひ出せるなり花に啼くうぐひす
水にすむ蛙の聲を聞けば生とし生けるもの
いづれか歌をよまざりける……

和歌は人の心を種として千變萬化するものにて人の心とは人情を指し、歌の根本は人情にありと先づ定義

を下し、次に世間の人は色々事繁きものにて、天子には天子の大御心にお懸けあそばす事あり、大臣宰相は大臣宰相の心にかゝる事あり、其他四民皆同じく繁忙複雑なるは是れ人生の常態なり、故に此繁忙の中にありて、欲する所、憧がるゝ所を遂げんとするも、十の八九は遂げ難きものなり、此心の中の煩悶懊惱を花鳥風月に托して吐露するもの即ち歌なり、何人にもある心中の喜怒哀樂、是れ即ち人情、人の心にして、此心中の感動を排遮するもの即ち歌なり、されば歌は決して六かしきものとは言ひ難かる可く、貫之も歌は作るとも詠むと

もいはず、言出せるものなりといへる是れ即ち人情自然の聲といへるものなり。貫之以後和歌は盛になりたれども、其根本主義は忘れられ徒らに技巧にのみ馳せたるが、近代に至りて香川景樹再び貫之の眞意を解し和歌の人情主義なるを論破せり。詩歌の尊き所以一に是に在りて存ず可し云々。の意を高崎男は熱心に御進講申された。

陛下は珍しく思召された御容子に拜せられたが、果して御氣色頓に和らぎ給ひ。古今の序も度々進講せしめたれども、汝が說く如き事を述べたる者なし。和

歌の根本は夫として、汝果して歌を容易なるものと思はゞ、今題を與へんといふに何とて固く辭みつるぞ。と責め給ふた、高崎男は御氣色直りたるを拜して大に心を安んじつゝ。夫は勅諚の歌と臣が所謂歌とは別のものなり、臣私に按じ奉るに和歌を敷島の道と申すは、日本の人が其眞情を發揮し、其誠意を流露せしむる者也。故に貫之等の所謂歌は、僞り飾らざる眞情自然の聲を吐露するものなれば。時に逢ひ折に觸れさへすれば、決して六かしきものには候はず。されど今陛下は難題を賜ひて强ひて咏ぜしめんとし給ふ、此の

如き歌は人情の流露に非ずして、技才を鬪はす一玩弄物のみ、敷島の大道には非ず。是を以て臣は辭し奉れり。技を競ひ才を鬪はすは福地成島などの人々妙を得たる可し、薩南の一武强漢高崎は左る事に通じ候はず。と奏し　陛下も此奉答を尤なりと思召しけるに、いとゝ御興を催ほさせ給ひつ、元來非凡の御强記に渉らせ給ふものから、以前の御製て冷泉、三條西などの大家が拜見したのを其座て御示し遊ばされて、遠慮なく評せよとの御沙汰てあつた。高崎男は永く御歌所に仕ふる身とは思はなかつたので、御船中の御徒然を

慰め奉る一時の御座興として少しも憚り奉らず、思ふまゝに御製を評し奉られた。此時凡そ四五十首も以前の御製を御示しになつたといふ事てある。從來冷泉三條西などの堂上風の歌人にのみ御示し遊ばされた御製を、薩摩男兒の高崎男に御示しになつたから、其奏する所は御耳に新しい所が多く、且つ和歌の根本などに就いての說も特に大御心に適ひ奉つたので、此御船中にて始めて高崎男の歌材を御信任になる事となつて遂には假の御歌掛が眞の御歌所長にも召される事となつたのてある。

御歌所長の新任

高崎男三ヶ條の願意。

陛下盡く御嘉納。

陛下は御還幸の御船中にて、高崎男の歌論を聞食し、深く其誠忠と歌材とを愛て給ひ、連日御召になつて、種々の御下問がある。されば この長さ燬が如き炎天の御航海にも御機嫌麗はしく東京の宮城へ御還幸在せられた。

高崎男は歸京後一時の御歌掛を辭する積だつた相だが、御許しが出ない。陛下は餘りに同男が御辭退申すのを御不審に思召されて。高崎も歌道は好めるに非ずや何を以て斯か辭退するぞ。との御沙汰であつた。高崎男は。御船中にては御慰みにもと存じ、且つは身に責任の重きを感ぜざりし故に、憚りもなく奏聞したれど、今まで假の御歌掛なりしを改めて御歌掛を拜命せば、臣に夫に相應する自信なかる可らず、固より此敷島の道は臣が深く好む所なるが、好むが故に是を等閑になし難し、薄學菲才の臣は一人の門人をも有せ

ず、全く臣は歌道を以て仕ふるの自信を有せず、此好める道に對し杜撰なる事は爲すに忍びず、自身の不熟を知り乍ら此勅命に從ふは　陛下に對し奉り實に恐懼に堪へざる次第なり。と奉答されたれども、陛下は尚も許し給はず、暫時御勘考の御模樣に拜せられたが、良あつて龍顏に微笑を含ませ給ひ。高崎汝が申す所は了解せり、未熟の故に朕が意に從ひ難しと辭するなれ。然れども思へ汝が年齡は殆ど朕に倍す、必ずや其經驗も亦倍無かる可らず。然らば朕は汝が知らざる事を尋ぬる事ある可らず、汝は唯汝が知る丈けを言へ

ば乃ち足る、汝が知らざる事を咲は、汝に責めず。と斯くまでも優渥なる勅諚であつた。高崎男は感激の涙禁め難く、此上辭退し奉るは　陛下の思召に對して恐懼の至りなれど、臣は師八田知紀にも歌道を以て君側に仕へ奉る事能はずと申し置きたる事もあり、且つ御船中にて、種々奏上したるは、單に　陛下の御徒然を慰め奉らんとの心に外ならねど、今は固辭する言の葉も候はず、謹て御受仕る可し、但し御受仕るに就ては三ケ條の御願あり、此三ケ條を勅許あるに於ては、大御心の儘に奉仕致す可しと。面を正して奏問された。陛下

は御機嫌斜ならず、三ケ條とは何ぞと御沙汰を待つて高崎男は徐ろに奏問された。

第一には彼の程明道の所謂玩物喪志の句を引用して、和歌に耽り給はぬとの御誓言を願はれた。まことに今日内外の御政務極めて多端に際し、萬一我が　陛下が歌道に御熱心の餘り些かにても機務の敏活を欠きたまふが如き事ありては、實に恐れ多き事なれば、此點を先づ願ひ置かざる可らず。萬機を親裁し給ふ至尊の御身は極めて御劇務に渡らせられ、毎日各大臣の拜謁奏上もある可く、各國使臣の參内もある可く、其他

官僚の拜謁を許さるゝ者も多かる可し、若し斯る際、和歌の爲めに些かにても其時間に差異を生ずる如き事ありては、是れ取も直さず歌道政務に累するものなれば、左る事決して無き樣に叡慮の程を伺ひ奉らざる可らず。と誠心面に溢れて奏上されたから、陛下は高崎男の誠忠を嘉し給ひ、御氣色麗はしく。高崎其點は安心せよ、との世にも忝けなき勅諚であつた。同男は此時思はず感涙を拭はれたといふ事である。

第二には御製を拜見するとなると、高崎男の考では世間の殿樣藝に　陛下の御製を拜見する事は嫌て飽

く迄忌憚なく氣付の點はお直しも申さうし奏聞もしやうといふ譯で、陛下に願はれたのは。一旦此田舍武士の高崎を御信任有る上は、臣は臣が信ずる所を奏す可ければ、時に或は言辭不敬に亘る事無きを保せず、幸に　陛下海大の聖慮によりて御許あれ。と奏されたが　陛下は御笑ひあそばして。道の爲めにする何の不敬かあらん。と有難き御諚であつた。高崎男は御前に据えてある御火鉢の火箸を取りて。矢を作るには篠竹の曲れるを矯めざる可らず、竹を矯むるには、例へば右へ五分直さんと思ふ時は五寸六寸一尺も曲

げて、始めて直るものなり、人を矯むるも亦同じ、時に或は寧ろ嚴酷激烈に過ぐる程せざれば、適度の矯正は遂げ難し。左れば御製を拜するにも、折々は左る事も有る可し。といと率直に奏せられた。陛下は其言の誠實なるを愛で給ひ。歌道に就ては存分にいへ咎めざる可し。と世にも畏こき勅諚であつた。而して第三の願を御促がしになつた。

されば第三の御願ひとは過る御船中にて以前冷泉三條などの歌人に示し給ひて、良き點なりし御製をも、臣は憚りなく御批判申したる如く、人の見る所は各異なる者なれば、臣が批評し奉る今後の御製も、人によりては反對の意見を奏上するやも知る可らず。故に御製は一方には御詠草のまゝ御保存あそばし、臣が御批判し奉つたものと双方後の歌人に示し給ふ可し、臣は批判し奉れども道に對して不安の念無き能はざれば。と奏せられた。陛下は一々御嘉納あそばして、高崎男は以上三ヶ條の御誓約を願ひ、彌御歌掛に命ぜられた。斯くて同男は御製を毎日拜見するに至り　陛下は其道の講義を聽かせ給ふたといふ事である。斯くて高崎男の御製の拜見し方は隨分嚴しく、最初の御約束の

通りであつた相だ。

此事に就ては一場の佳話があるから、項を改めて謹錄し奉り、更に　陛下の御文德を讃へ奉らうと思ふ。

如何にして御製は成るか

一冊の御手帳と鉛筆。

御靜座の御暇なし。

陛下は一日五六十首も御製があると承はるが、如何なる場合に如何にして御製をあそばすてあらうかは四民齊しく拜聞したいと思ふ所である。今仄かに洩れ聞えたる所によりて察し奉るに　陛下は常に一冊の御手帳を御所持あそばして在らせられる。御製は

常に此御手帳へ鉛筆にて親から御認めあそばすといふ事である。

世間並の歌人などいふ人々は机を清め硯を洗ひ静坐良久しくして始めて二三を詠み出づるに過ぎぬ。否多くの歌人は感想なきに無理に舊句を連ねて歌の形したるものを拵へ上げるに過ぎぬ。詩趣もなければ、溢るゝ眞情も無いのは當然である。

然るに我が　今上陛下は畏くも如何なる日とて御閑座の御暇は在まさぬ、御座所にても、御學問所にても、放ち給はぬ御手帳に隨時鉛筆を取り給ひて何やらん

御認めあそばすのを拝し奉る。御側近く仕へる方々も、陛下が何を御認めあそばすかは伺ひ知られぬが、察し奉るに畏くも其時御製がお浮みになつて、御書取りあそばすのであらうと申して居らるゝ。

陛下は高崎男への御誓言も有る事て、決して歌の爲めに別に御時間を費し給ふ事は在まさぬ。御机に向ひ給ひて御料紙の前に御熟考あそばすなどゝいふ事は絶對的に在まさぬ。唯々　陛下は其行住坐臥の間に思ひ浮べ給へる所を直ちに三十一文字に表はし給ふのて御製の神速なるは何人も驚嘆し奉る所である。

此事は高崎男も話された事がある相だが、陛下の御製の御達吟御速詠に在ます事は恐らく古今上下に其例は無いと讃嘆し奉つて居られるといふ事である。

陛下が其御繁多なる御政務の間に絶えず御製を遊ばすのは、彼悠々閑々として歌作りに暇を潰す儕輩に取つて、誠に恐多く忝けなき御教訓ではあるまいか。陛下の御製を洩れ承り乍ら、尚且つ歌の爲めに業を怠り務を忽せにする者があつたら、實に廣大無邊の聖旨に對し奉り、當に愧死す可きである。

御題は如何

陛下の歌道に對する叡慮。

皇孫殿下を思ひ給ふ。

陛下の御製は時折世間にも洩れる事であるから、世人も承知して居る事ではあるが、多く如何なる御製をあそばすかを察し奉るは、敗島の道の爲めにも誠に結構な事と、考へられるから、尚少しく記し奉らう。

陛下は如何に和歌といふものを御覽になるかと、私

に察し奉れば、嘗ての御製に

むらきもの心を種の教草
生ひしげらせよ大和島根に

とあそばしたのか、即ち　陛下の歌道に對する御覺悟を拜する最良の御製であらうと察し奉られる。此御製により察し奉るに、陛下は貫之の所謂大和歌は人の心を種としてといふ人情根本主義を御酌みあそばされ和歌を以て情育德育の上に重大なる職責を有するものと見做し給へる事が分る。茲に於てか世の技巧

のみを弄べる歌人達が何の定見もなく歌を作り上げるのとは天地霄壤の隔てが其所に現はれるのも誠に謂れある事と察し奉られる。

斯の如く　陛下は和歌は至誠眞情の流露したるものならざる可らずとの御考へで在ますから、御製を拜しても實に人情自然の響を聞くの念がする。實に一誦し奉りて大御心の優渥なるに感泣せざる能はざるもの多きは偏に此自然眞情の御製の然らしむる所である。

然らば陛下は如何なる御題を多く詠み出でさせ給

ふかと承はるに、國事を思ひ給ふ如き、或は、教育の事、五穀風雨の事、軍人軍國の事など、常に御念頭を去らざる事柄は、絶えず金玉の御製となりて現はれる。特に近年に至ては皇孫殿下の御身の上を懐ひ給ふ御製が多いと承はつては、國民一同は實に大御心の程を察し奉りて、何とも形容し難き麗はしく忝けなき感慨に打たれるのである。

御製は如何に拝見さるゝか

嚴正なる御歌所長。
税所刀自と高崎男。

陛下は御製を悉く御歌所長高崎正風男にお下げになる。大概月に一回か或は隔月位に數百首の御製が下がる、一度に七八百首もお下げになるので、高崎男は數日齋戒沐浴して禮服を着用し謹て拝見される相である。御製は宸翰のまゝ下る事と、奉仕の女官の寫し

奉りて下げられる事とある。高崎男は御宸翰には筆を加へ奉らず、別に寫しを取りて夫に朱を加へられる。而して如何なる點を御製にお付け申さるゝか、下々には久しく承る事を得なかつたが、或年某老女官の物語られた　陛下の御製の話の折に、承り及びたる所によれば、最上は圏を二つ、次は圏に點二つ、圏に點一つ、圏一つ、點一つ、の五種であるといふ事である、今も尙ほ此通りの點をお付け申さるゝ事であらうと察しられる。

高崎男は根が薩摩武士の飽まで剛健正直の人であるから、最初　陛下に誓ひ奉られた如く少しも憚からず拜見さるゝ相であるが、　陛下は實際其道に御熟達遊ばされたから今は殆ど筆を加へ奉る可き所は無いといふ事である。

初め高崎男が御製を拜見する事となつた頃は、　陛下も其嚴格なるを感じ給ふたといふ事で、是に就ては一場の物語がある。

今は亡き稅所敦子刀自は、女流歌人として當時第一の稱を得た方であつたが、永く宮中に奉仕して居られて。高崎男とも親しく歌道の交りを結ばれた事であると思はれるが、或時敦子刀自は男に向はれて。此頃

貴殿の御添削は餘り嚴格に過ぎ、上點を差上げらるゝ事無き故、陛下は殊の外御屈托あそばさるゝやに拜し奉らる、斯くなりては敷島の道の爲も如何ある可き、況してや一天萬乘の君の御氣色麗はしからぬ事ともなりては、貴殿の誠忠も貫徹し難かる可し、と細々の忠告をされた。所が高崎男は面を正して。御忠告は千萬忝けなけれど、夫は以ての外の儀なり、最初御製拜見を仰付けらるゝ折、陛下に對し堅く御約束申し置きたる事なれば、高崎は所信を枉げて上に阿る事能はず。若し又萬一高崎が點に御意に召さぬ節あらば、歌人は

多し、他に拜見を仰付けらるゝも宜しかる可く、又高崎が餘り嚴格なりとて、一時御製の數少くなりたりとて、陛下の御稜威に何の累する事か之有らん。陛下の和歌を嗜み給ふは、綽々として御餘裕あるを示し給ふのみ、内外事繁き今日、陛下の親裁を待つもの日に日に進達さる、此煩劇の間にありて御製あるは古今に勝れさせ給へる爲なり、何ぞ必ずしも歌道の御志薄くなり給ひたりとて、陛下の御稜威に露ばかりも欠くる所あらんや。而かも陛下は歌道の眞義に通曉し給へり、高崎が酷なる御批判を申したりとて、此道を捨て

給ふ事ある可らず。と繰返し〳〵述べられたから、税所刀自も理の當然に服し、居合はせられた他の女官ども面を赤らめられたといふ事である。

然るに其後二三ヶ月を經て、或日の事に、税所刀自は陛下の御前に出られたが、折柄高崎男より御製の拜見濟を差上げられた。陛下は一々御覽あつたが、此時始めて一卷の中に三首最上の點があつた。陛下は龍顔殊の外麗はしく、税所刀自を麾ねぎ給ひ。是を見よ歌は斯く詠む物ぞ。と御沙汰ありて最御滿足に思召された御模樣であつた。税所刀自は此時始めて君臣

相信の深さを曉つて感慨措く能はず直ちに御前を退出し使を出して高崎男を招かれた高崎男は税所刀自よりの使と聞き、何事かと行つて見られると、刀自は過日の失言を謝し今日といふ今日貴殿の硬直と　陛下の御信任を會得したりと感涙に咽び乍ら物語られたといふ事である。古來君臣相信の美談は多いが、特に夫が最高雅優美なる歌道に關するものであるから、此一場の物語は更に光彩を副へるものである。

陛下が毫も高崎男の嚴格を忌み給はず、一に斯道に篤き大御心を示したまへるは、亦實に一の敎訓物語と

して全國の兒童にも知しめたく思はるゝ事柄である。
吾人はかへす〳〵も　陛下の大御心に感泣せざるを
得ないのである。

御製老農を起たしむ

出征軍人の老父。
御製に感激す。

今上陛下の御文德を讃へ奉るに就ては、茲に逸し難き一の物語がある。事は某縣の邊邑に起つた事であるが、過る三十七八年の役に際して去る老農が頼み切つた息子を召集されて、一人留守する事となつたが、今は寄る年波に身の働きも自由ならず杖とも柱とも頼

んで居た息子は戰場に召出されて、淺慮にも自暴自棄の氣味となり僅かばかりの田畑も耕さず、日々なす事もなく暮して居たが、鍬を入れぬ田畑は日ましに荒れ増りて草茫々となつてしまつた。村の甲乙も氣を揉んで色々忠告もし勵ましもしたが、既に此世に望みは無いと斷念めたと言つてはゴロ〳〵寢轉んで居る。今は一同困じ果てゝ其儘に打過ぎたが、偶々當時新聞紙上に洩れ記された御製があつた。其中の一首に、

子等はみな軍のにはに出果てゝ
翁やひとり山田守るらん

とあそばしたのがあつたのを、件の老農は聞及ぶとはつと我に返つた。我が天皇陛下は賤しき我等農民の上を斯く迄も思召煩給へるかと、氣が付いて見ると、今までの自墮落が申譯なくて堪らず、匆皇衣服を改めて遙に帝都の方を伏拜みて身の罪を懺悔し、直ちに村長の許に馳せ行きて咋非を謝罪し、今後必ず此限り無き聖旨に酬ゐ奉る可し、と涙を流して述べたから居合はす人々も共に涙を拭ひて、其迷夢の醒めたるを喜び合つたが、夫から件の老農は生れ更つた樣に、又元の勤勉に歸つて、一意自家の田畑の豐作を待つに至つたと

いふ話である。

嗚呼、一首の御製が邊邑の老農を奮起せしめたといふのは實に後世に貽して鑑とす可き物語で、陛下の御文德の洪大無邊なるを伺ひ奉る可きである。

貫之の贈位

畏こき叡慮。

陛下が歌道に對し給ふ御覺悟は、既に述べた通り、其根本を人間の眞情至誠に置かせ給ひ、貫之の古今和歌集の序に人の心を種としてといへるをいとゞ深く嘉したまふたのである。されば陛下は畏こくも貫之の歌道に於ける功勞を思ひ給ふ事一方ならず、常に其

歌を賞て給ひ、其歌に對する見解を稱し給ふといふ事てある。

陛下は斯く貫之を思ひ給ふから、先年忝けなくも位階を追昇あそばされたのてある。

嗚呼、千古の歌聖として貫之の名聲は失は無かつたが、一千年の間昇位の恩命を蒙つた事は無つた。然るに今上陛下に至て始めて此恩典に浴したのてある。貫之の靈は如何に有難く思つたてあらう、墓碣爲めに動く程てあつた事と思はれる。

又陛下が内外多端の政務を御親裁あそばす傍らに、此歌聖に優詔を賜はる事をあそばしたのは、歌道に對する叡慮の如何に深きかも察し奉られる事て、實に恐多い事といはねばならぬ。凡庸の人の身ては欠く可らざる義理さへも其身の忙しさに任せて、打捨て置くが普通てあるに、御歴代の天皇の中にも最事繁き今上陛下が貫之の昇位を賜はつたのは實に非常の事といはねばならぬ。御歌所長高崎男が此の理を考へて、貫之の靈前に感泣多時だつたのも實に當然の事て、歌道に疎き輩すら尚且つ感激し奉る次第てある。

二十三年の御製

國會開設に宸襟を惱ましたまふ。

平年の十分一の御製。

陛下が多く選ませ給ふ御題は、前にも述べた通り國事民衆の事、五穀風雨の事、別けて近年は皇孫殿下の御事などであるが、勿論花鳥風月の御製も少くない。少くないのみならず、實に夥しい。何しろ毎年二三千首の御製があつて、明治十年高崎男が始めて御製拜見を

仰付けられて以來、既に七萬首以上を拜見されたといふ事であるから、無論同じ題に多數の御製があるのは當然の御事である。否、陛下は同じ題を忌み給はぬのみならず、普通の人には陳套なりと思はるゝ、花や鳥や月やといふ如き御題を各數千首もあそばしたといふ御事である。是亦到底下々の者には思ひも寄らぬ事で、題古しとて名歌の出來ざる事なしとの叡慮は、實に世の浮薄なる流行のみ趁へる、輕佻兒に取りて、重大森嚴なる御教訓である。陛下の大御心を用ひ給ふは概ね此の如く、一々拜して以て國民の大教訓大活證と

なす可きて、此點をのみ以て拜し奉るも、優に宇内に冠たる可き　聖天子である。

斯くの如く　陛下は毎年二三千首の御製があるが、明治二十三年に限つて僅に二百首餘りの御製のみであつた。高崎男始め御歌所の人々は、陛下が歌道に御倦みあそばしたのでは在ますまいかと、私に心を痛めて居られる向もあつた相だが翌二十四年には又二千首以上の御製をあそばし、引續き今に至る迄毎年二千、三千、多くあそばす年は實に四千首にも上るといふ事である。で二十三年に限つて御製極めて少かりしは

何故であるかと申すと、恰も其年は國會開設の年で、從來本朝に其類例なき民選議院を御開きになつて、地方の議員を御召集になり、立法の大權を分ち給ふ事になつたから、畏こくも　陛下は日夜其趨勢と結果とに就いて宸襟を惱まし給ひ、一意國事を御親裁遊ばしたから　遂に御製の數も著しく少なかつたのである。　陛下は議會に就て

に至て思ひ合せ奉つたのである。　陛下は議會に就て

は斯程に宸襟を惱まし給ひたる御事であるが、此事を承りて叡慮の程を察し奉ると、若しも不謹愼なる、眞面目ならざる輩の、身に立法の大責任あるを自覺せず、み

だりに、暴狀を逞うするを以て自ら勢力なりと誤想し、殆ど聖旨の那邊にあるやを解せざる如きがありとせば實に實に相濟まざる次第である。

戀歌の御製なし

戀の題を奉らず。

近藤翁高崎男と論爭す。

陛下の御製には如何なる御題が多いかは既に繰返し述べて置いたが　陛下は全く戀歌の御製がないのである。平常高崎御歌所長は歌の御題を奉られる事も有るやに洩れ承はるが、固より同男は戀の題を奉らぬ。高崎男は一人も門弟といふ者を有せられぬが、其

平常の持論として、若し門弟を持ちても決して戀の題は與へじ、元來戀は敎ふ可きものに非ず自然に悟る可きものなり、と言つて居られる相であるから、況して一天萬乘の君に戀の題を奉られる事は無い譯である。けれども　陛下は高崎男が奉られぬから、戀歌の御製をあそばさぬといふ譯では決して無い。元來戀は人情の極致とまていはれるから、人情を根本となさせ給ふ御製には、第一に戀の御製をあそばす事かと、察し奉るのであるが、　陛下は別に深き〳〵大御心よりして戀歌の御製が無いのである。　是に就て故近藤眞琴翁

と高崎男爵との間に一場の物語がある。　少しく餘談に亘る嫌もあるが是に記して置かう。

攻玉社長として和漢の學者として、近藤眞琴翁は世に知られて居るが、假名の會の關係て高崎男と親しくして居られた。　或時高崎男が近藤翁の塾へ來られたから、翁は座にある五六の門人に男爵を紹介して。　歌道に功勞ある御方にて、恐れ多くも　今上陛下が戀歌をあそばさぬも、亦此男爵の功といふ可し。　と言はれたので同男は吃驚して、是を打消し。　今上陛下に戀歌を御止め申したる事毛頭此身に覺なし、右樣の事を言

はれては　陛下に對し奉りて此高崎が申譯なし。と敦圍かれたので、近藤翁も夫は恐れ多い事だと、直ちに謝罪された。

所が今度は、近藤翁と高崎男の戀歌論が始まつた。高崎男は。余は戀歌を惡きものとは思はず、從て　陛下にもお諫止申したる事なし。然るに貴殿は戀歌を止め奉りたる功勞ある人と、余を目されたるが、然らば戀歌を惡きものと思はるゝにや、其理由を承はりたし。と逆に議論を始められた。近藤翁は。理由などゝ仰々しく云ふまでもなし、第一に例へば百人一首一部の

内、多くは家庭子女の間に講授し難きに非ずや。と言はれると男爵は。這は解しからぬ事を承はるものかな、何條戀歌を禁ずるの理あらん。と言はれる。翁は其理如何を訊ねられると、男爵は茲に一場の戀愛神聖論を始められた。

余が所謂戀なるものは、花柳の巷に出入して不潔なる儕輩に狎るゝ如き色慾の奴隷を指すものに非ず。尚遙かに高尚にして人情の自然に出で、而かも人倫に悖らざるもの即ち余が所謂戀なり。貴殿は戀歌の講義は爲し難しといへり。果して然らば敢て問はん、男

女室に居る人の大善也、といひ、不孝は後無きを大なりとす。といひ、賢を賢として色に更へよ、賢を好む事色を好む如くせよ。といふ孔孟の書は如何に講ずるや、之れ人間自然の情最も切なるものならずや。萬葉、古今の戀歌を排斥して說かざるは、姑らく之を可とするも、孔孟の書も亦說かずして斥けんとするか。

翁は此言葉に赫と怒り。詩經の戀は正し、日本の歌にある戀は即ち墻を超えて處子の袖を引くものなり。と憤られたが、男爵は更に語を次いで論難された。

戀に和漢の差ある可らず、男女相慕ふは天道なり、袖

を引くも情惡きに非ず、禮に欠けたる也。之れ情を完ふせんとするものにて實に人情也。婚儀の式重きは紊れざらんが爲めのみ。情には古今東西の別なし、心中に燃ゆる情は之を奈何ともす可らず、唯之を發露するや否やは即ち禮により節せらる、邪淫は戒む可し何ぞ情を制し得可けんや、孔子も盜跖も情に至ては即一のみ。

翁は尙怒つて此說を肯かれぬ。左程戀を善しとするならば、何故に　陛下に其御題を奉らざるか。と反問された。男爵は夫に答へて。戀は勸むる物にも敎

ふる物にもあらず、又練習す可きものにもあらず、是れ陛下に對し奉りても戀の題を奉らざる所以也、決して其題を忌むには非ず、奉るの要無ければ也。と言はれたが、其時は翁は遂に男爵の説に服せられなかつた、のみならず大いに怒つた儘、別れられたといふ事である。

其後半年許り經て又高崎男が翁の許に來られた。翁は其時、毛利家に實物を傳へて有名なる紀貫之の眞筆で、世に高野切と稱するものゝ寫眞版を床に掛けて居られた。而して高崎男を見て翁は、貫之の文に詩に

書に秀でたるを稱し蘇東坡に比して讃められたが、實は貫之祭を執行したき考なりとの話も出た。高崎男も無論大贊成であつたが、其序に高崎男は翁に對して質問さるゝには。君幸に貫之を尊信す、依て余は問ふ可き事あり、貫之勅を奉じて古今集を撰するに際し、其方針覺悟は果して如何なりしか、余淺學菲才を以て今御歌所にあり、切に貫之當時の所信を知らんと欲す、君發明する所あらば幸に余に敎へよ。と言はれたが翁も別に意見は無つた。男は更に。他の集に就て見るに多少會得する所あり古今集に至ては大いに迷ふ。

と言はれたが、翁は。君こそ何等かの考ある可し。と問はれたけれども男は未だ考纒まらずとして答へられなかつた。さて自分て氣附が無つた疑惑を人に注意されると、誰ても甚しく不安を感ずるものであるが、翁も切りに氣を焦ちて其圓熟せざる考察にてよし、是非語り聞かせよと再三再四迫られるので、最初質問を出した高崎男は、却て自ら答へなければならぬ事となつた。

凡そ物は、撰むに隨て整ふものなり、俗にいふ粒が揃ふものなり、然るに撰びに撰びたる古今集は決して然

らず、其歌參差として等からず、此點を以て熟々惟みるに、貫之が其序にいへる如く、其主義方針とする所は人情根本にて、言はゞ情育主義とも云ふ可きものには非ざるか、撰評の標準を形態に取らず、一に其情趣の淺深厚薄に據れるには非ざるか、和歌にして死物ならば同一型のもの幾何にても作る可し、然れども活物の人情其儘を流露せしめたるものならば勢ひ區々の差別を生ぜざる可らず、斯く見來れば他の撰集は歌といふ同一範圍内に跼蹐せり、古今集は森羅萬象活々したるものあるに似たり、君以て奈何となす。

男は此の如く語られたが、語了るや否や謹で聽いて居られた翁は、急に三尺程も飛退きて平伏し。貫之の歌聖たる所以今始めて顯然たり、過般の貴説も今日に至て解するを得たり。と大に欣喜の狀をされて、急ぎ口嗽ぎ手を淨めなどして床の掛軸の貫之の筆に對し、宛ら生きたる人に物言ふ樣に從來の不明を謝され、落涙して禮拜せられたといふ事てある。惜しい事には幾もなく世を去られたから貫之祭も執行の間が無つた相てある。

御製

御製の夥しき事は既に記し奉つたが、世に御示しになる事は無い。唯新年の勅題に對して毎年御製を萬民に御示しあそばさるゝのみてある。今或筋より仄に洩れ聞えた最近の御製を錄し奉りて此編を飾らんと思ふ。

寄道述懷

ことのはのまことのみちをつきはなの
もてあそびとはおもはざらなん

教

ひらけゆくときにいよ〳〵あふがれぬ
ひじりのみよのたかきをしへは

夏人　事

まどのうちにあふぎとりてもあつきひに
てるひをうけてをくさかるみゆ

子

たらちねのおやのおしへをまもることは
まなびのみちもまよはざるらん

思往　事

たらちねのみおやのみよはしらくもの
よそちのよそになりにけるかな

老人

たらちねのみおやのみよにつかへたる
おいもすくなくなりにけるかな

子

おもふことおもふがまゝにいひづる
おさなこゝろやまことなるらん

時計

ときはかるうつはのはりのともすれば
くるひかちなるよにこそありけれ

ひさしくもわがかふこまのおいゆくを
をしむは人にかはらざりけり

めにみえぬかみのこゝろにかよふこそ
ひとのこゝろのまことなりけれ

まうでくるひどのこゝろをあらひけり
みたらしかはのみづのしらなみ

としのなをしるすかはらにいにしへの
いへつくりこそおもひやらるれ

今上陛下御文徳録　完

文祿堂編輯局編纂

明治四十一年一月十五日印刷
明治四十一年一月十八日發行

不許複製

編輯兼發行者　東京市日本橋區江戸町壹番地　堀野與七

印刷者　東京市麻布區西町廿六番地　石川金太郎

印刷所　東京市日本橋區濱町廿六番地　銀秀英舍

發行所　東京市日本橋區檜物町壹番地　文祿堂書店

電話本局八十八番

定價三十五錢

19
639

006120-000-2

19-639

今上陛下御文徳録

堀野　与七／編

M41

ACJ-0069